みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アーミッシュを訪ねて１：歴史的背景と多様性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5806

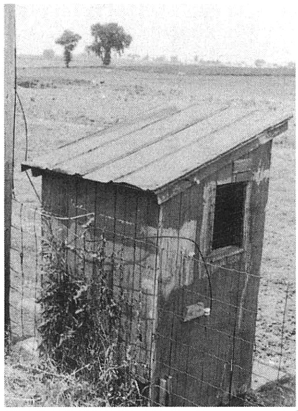
新連載

アーミッシュを訪ねて

歴史的背景と多様性

鈴木七美（すずき　ななみ）

「アーミッシュ」といわれて読者のみなさんは何を思い浮かべるだろうか。世界の先端を行く文明国アメリカにあって、機械文明をかたくなに拒絶し、自動車も電話も使わずに自然と共生する信仰深い人々、あるいはあえて時代錯誤的な生き方を選び取り、一種風変わりな信条を守るキリスト教の一派、というあたりが一般的な理解かもしれない。しかし、「アーミッシュ」と一口にいっても、その内実は多彩である。古くからの戒律を厳しく守り、一九世紀以来ほとんど変わらない生活を送っている一派もあれば、自動車を乗りまわしインターネットを駆使しながら、生活信条においてはアーミッシュの基本を保持している人々もいる。彼らがどのような生活をし、どのような信条を旨とし、それが現代世界においていかなる意味を持っているのか。これから六回にわたる連載の中で、筆者が見聞きしたことを報告しながら、そうしたことを考えてみたい。



緊急用の共同電話

◎モラヴィアンからアーミッシュへ

私のアーミッシュへの関心は、思わぬ副産物からもたらされた。私の専門は医療人類学であり、フィールドワークの一環として、一九九七年アメリカ合衆国南部のモラヴィ

1

ア教徒の食文化やハーブに関して調査したことがその端緒となった。ノースカロライナ州ウィンストンセーラム市の一角に残るオールドセーラムは、一八世紀半ばにペンシルヴェニア州からモラヴィア教徒が入植したところで、現在も建物が保存され、教会の周辺にはモラヴィアンが集住している。モラヴィア教会は、一五世紀にローマ・カトリック教会を批判し火刑に処されたボヘミアのヤン・フス(Jan Hus)に遡る。初期プロテスタントの一派モラヴィアンは、現チェコ共和国のモラヴィアで活動したのちジョージアからアメリカに入りペンシルヴェニアのベスレヘムなどに次々とコミュニティを建設し、より広い土地を求めてノースカロライナへの南下を企てた。

モラヴィアンは手工業と交易を中心にアメリカ社会に溶け込み、世界への伝道を志す都市型の宗派である。ところが、同様に信教の自由を求めてアメリカへ渡りながら、対照的な生活様式を選び取っている人々がいた。それがアーミッシュであり、彼らは大地を耕し外の世界とは異質な空間を守り続けている。対照的な生き方を選び取った人々がともにアメリカ合衆国を構成していることがとても興味深く、私の関心はアーミッシュにも広がった。

一九九八年からは、毎年のように学生たちを連れて研修のために合衆国各地のモラヴィアンやアーミッシュのコミュニティを訪れた。そこで私自身が経験したこと、そして帰国後学生たちが書いたレポートや彼らの討論のなかで気付かされたことなどが、この連載の基盤をなしている。

◎アーミッシュの起源

ペンシルヴェニア州は「ペンの森」として知られ、ユートピアや宗教的寛容を掲げたクェーカー(Quaker)教徒ウィリアム・ペンを頼って様々な宗派の人々がこの地を目指した。移民の多くは、スイス、オーストリア、ドイツなどドイツ語圏からやってきたのでペンシルヴェニア・ジャーマン、もしくはペンシルヴェニア・ダッチと総称される〔この場合の「ダッチ」(Dutch)はドイツ語のDeutsch(「ドイツ人、ドイツ語」という意味)がなまった形〕。一七から一八世紀にかけて宗教的迫害や三〇年戦争による荒廃など生活状況、信念、世界観に関わる問題が人々を新天地へ向かわせ、新たな宗教的コミュニティとして、クェーカー、エフラータ・クロイスター、シェーカーなどが組織された。多様な宗派の共存は、一九世紀アメリカで花開い

た生活様式を問い直す数々のオルタナティヴ・ムーヴメントとも深く関わっている。

アーミッシュの起源は一六世紀の宗教改革急進派「スイス兄弟団」に遡るとされる。兄弟団は、ルターやツヴィングリの宗教改革を不徹底と糾弾し、成人が自らの意志でキリストの教えに従うときのみ洗礼するべきだと主張した。「再洗礼派」とも呼ばれた彼らは二世紀にわたって迫害され、モラヴィア、アルザス、ライン川両岸のプファルツ、オランダそして北米に逃れた。オランダではメノー・シモンズが一五三〇年代よりリーダーとなりメノナイトが形成された。一六〇〇年代後期にはスイスのメノナイト急進派がライン川とボージュ山脈の間のアルザスに移動し、一六九三年、ヤコブ・アマン（Jacob Amman）に従うアーミッシュが生まれた。アマンは聖餐式を年二回に増やし洗足を儀式化するなど厳格なきまりをもうけ、破門あるいは忌避（シャニング）（shunning）は宗派からの追放のみならず社会的追放であると解釈してメノナイトと対立した。

◎アメリカにおけるアーミッシュの展開

メノナイトは一六八三年、フィラデルフィア近郊に居住地を拓き、一七一七-三二年にランカスター地域に移住した。アーミッシュは一七三七年から、現在のランカスター市北東数マイルのオールド・コネストガおよび北東三〇マイルのバークス郡南部ノースキルに最初の居留地をもうけた。一九世紀半ばまで一五〇人程度の成人メンバーを数えるのみであったが、現在北米にはアメリカ（二〇州を超える）およびカナダのオンタリオ州に六六〇ほどのアーミッシュ教区が存在し十万人もの信者を擁する。アメリカのアーミッシュのおよそ七〇％がインディアナ、オハイオそしてペンシルヴェニア州に暮らしている。ランカスターには、急速な都市化・産業化にもかかわらずペンシルヴェニアのアーミッシュの半数がおり、一万六千人ほどのオールドオーダー・アーミッシュは増加傾向にある。

ランカスターには全体で七〇以上の宗教グループがあるとされ、そのうち三七が「プレーン（plain）」と呼ばれる人々である。伝統的な服装や厳格なライフスタイルを守る人々という意味で、州の成人人口の一五％を占める。ブレスレン教会やメノナイト急進派のように周囲の文化に溶け込んでいるものもある。厳格なことで知られるオールドオーダー・メノナイトはおよそ五千人のメンバーを有する。

ランカスターのアーミッシュの八〇%以上が、家で礼拝を行うので「ハウス・アーミッシュ」とも呼称されるオールドオーダーである。オールドオーダーは一九世紀の後半から三度分離の時期を経ている。一八七七年には、二つの急進的なグループがアーミッシュから離れ、礼拝のためのミーティング・ハウスを建てた。このためそれまでのアーミッシュはオールドオーダーあるいはハウス・アーミッシュと呼ばれるようになった。分離したグループは、アーミッシュ・メノナイトあるいはミーティングハウス・アーミッシュと呼ばれ教会で礼拝を行うこともある。二度目の分離は一九一〇年で、シャニングの厳しい解釈と意見を異にするグループがピーチィ（Peachy）・アーミッシュとして離れた。服装はオールドオーダーとあまり変わらないが、日曜学校を開き多様なテクノロジーを利用する。今日彼らはビーチィ（Beachy）・アーミッシュと合併している。三度目の分離は一九六六年で、農場でトラクターなど現代的な機械を使用するニューオーダー・アーミッシュが離れ、彼らはさらに細かなグループに分かれている。多様なグループの存在は神学的解釈と生活実践における相違にもとづき、車やトラクター、テレビや電話と電気、日曜学校、シャニングのあり方などがシンボルとして機能している。

◎様々なアーミッシュ

研修で毎年私たちを迎えてくれるのは、ビーチィ・アーミッシュ（メノナイト・アーミッシュとも呼ばれる）のエイダさんとメノナイトの姪のローズさん一家だ。ランカスターの農場を回る道々エイダさんは自分がビーチィ・アーミッシュとなった経緯を語ってくれる。エイダさんは、オールドオーダーとして洗礼を受けたが、しだいにシャニングを含む厳しいきまりに疑問を持つようになりコミュニティから離れた。今もエイダさんにはオールドオーダー・アーミッシュの友人がたくさんいるが、彼らはエイダさんの家で食事を共にすることはなく車に同乗することもない。ところが彼らは、アーミッシュとして洗礼を受けたことのない人の車には乗ることもある。たとえば、ローズさんの場合がそれで、彼女はアーミッシュの両親のもとに生まれたが、アーミッシュとして洗礼を受けずメノナイトとなることを選んだ。そのため、アーミッシュたちは彼女の車には喜んで乗せてもらう。ビーチィ・アーミッシュに転向して後悔はないというエイダさんだが、病気の両親を看病で

きないことは悲しいという。

エイダさんは、夫に死別した後は姪のローズさんたちと暮らしている。彼女は車を運転し、アーミッシュの生活を人々に伝える仕事を続けている。服装はいつも、白いキャップにペパーミント・グリーンのワンピースだ。キャップ一つにもグループごとに特徴があり、互いに見分けられるという。ローズさんの長女クリスタルさんは、ふつうのアメリカの若者らしい服装をしている。神は外見より心を見るからだという。エイダさんたちは電化された機能的なキッチンで料理し、子供たちはインターネットで日本の学生とも語り合う。彼らが「アーミッシュやメノナイトらしい」と感じられるのは、生まれた土地から離れず、肥沃な大地を慈しみ、動物を飼い、自給自足を心がけ楽しんでいる点だ。大皿に盛りつけたトウモロコシ、グリーンピース、チキン、パイなどを家族で取り分けて食べる瞬間を彼らはとても大切にしている。かつて信条の違いからオールドオーダーとビーチィは異なる生活を選んだが、それが大切に思うものを隔てたとは言い切れないだろう。

エイダさんが懇意にしているサムさんの農場への小道を入っていくと、確かにそこにはオールドオーダーの世界が広がっている。サムさんは毎年通っている私たちの友人となってくれ、学生の質問にも農業の合間をぬって答えてくれる。だが、最初に話をしてくれるのは私たちのバスの中だ。ゆっくりした会話の後、ようやく私たちは彼の「聖地」を歩き空気を吸うことを許される。農場には電線が繋がっていない。電線は外界あるいは近代社会の悪を導入するものと考えられているという。電話も望ましいものではない。広大な農場の遙か端にポツンと置かれた木造の電話ボックスは、緊急用に共同で設置しているものだ。外の世界の人々を一括して「イングリッシュ English」と表現する。サムさん同様麦藁帽子を被り白いシャツにサスペンダー付きの黒いズボンをはいている子供たちは私たちを見てはいるが、目を合わせようとすると、小さな二輪がついたスクーターに片足を乗せもう一方で地面を蹴って広大な農場へ出て行ってしまう。自転車が認められていない理由は不明だ。家族で農作業を行うサムさん一家にとって楽しみは、家族揃ってとる食事とキルトづくりである。最近は、訪ねて来る人々のためにレシピをまとめたりキルトを売ったりしている。アーミッシュの観光化の影響を受けているサムさん一家においてオールドオーダーの生活は少しずつ

変化しているはずだが、大切な点を尋ねると、やはり家族揃って暮らすことという返事が返ってきた。子供たちが大きくなってオールドオーダーの世界から出ていこうとしたらどうしますかという質問に、サムさんは「悲しいけれど子供の好きにさせる」と答えてくれた。

サムさんの農場からほど近いところにあるオールドオーダー・メノナイトのベンさんの農場は驚くほど電化されている。いくつもトラクターが並び、農場内のアイスクリーム・ショップにはここで作られた牛乳やアイスクリームを求める人々が訪れる。とはいえ服装に関してベンさんは保守的だ。サムさんとほぼ同様の格好でズボンだけがグレーといういでたちだ。ベンさんは子供の将来に関しては、「必ずメノナイトの農夫に育てる」と断固としている。

自らを表現する生活様式においては細かな違いがみられるが、大地を感じながら暮らすことや家族とともに生きることを望む点はみな共通している。そもそもヨーロッパでは農夫とは限らなかったアーミッシュにとって、アメリカの大地を耕すことがなぜそれほどまでに重要なのか。様々な「伝統」は守られてきたのか、それとも創出され続けているのか。これらの問いを、アーミッシュの人々の信仰と生活、家族とコミュニティ、食文化、教育と言語、フォークロアとキルトなどを素材として考えてゆきたい。

〈上〉**アーミッシュの家の洗濯物**　洗濯の曜日は月・金と決まっているという。／〈下〉**エイダさんとローズさんの家族**　キッチンで。

【参考文献】

Kraybill, Donald B., *The Riddle of Amish Culture*. The Johns Hopkins University Press, 1989.

鈴木七美『アメリカ合衆国南部における植物治療とハーブ・ガーデンの伝統と変容』（平成10-13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告、2001年）

（京都文教大学／歴史人類学・医療人類学・北米文化学）